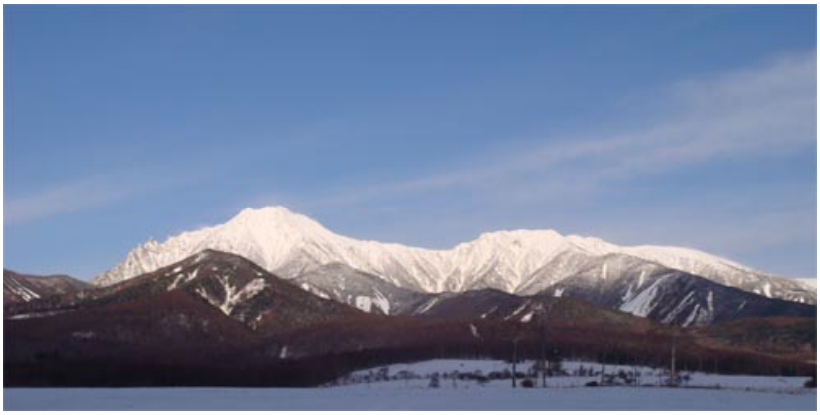
観察 Observation　3 月



3 月の八ヶ岳

卵

野生動物学研究室教授　高槻成紀

私は自分のブログに年頭の思いとして、次の文を書いた。

［わからないこと］

なんだか年末に世界恐慌だとか、おだやかならぬことになってきました。私には世の中のことはよくわかりません。同じように働く人が仕事の違いで給料が違うというのは当然だと思うのですが、やはり同じように働いているのに会社がつぶれたり、金の操作のようなことで、ある国が儲かったりと、どうもよくわかりません。気にいらないのは、労働という、肉体に直結すべき行為と収入でさえ、実感とつながらない世の中に生きないといけないということです。田んぼを1枚作るよりも、がんばって2枚作るほうが収入が多くなるといった、わかりやすさがない世界に生きているということです。

このわかりにくさについて、私は生物学者だから、ヒトをサルの一種と見ることで考えてみます。赤ん坊を見ていると、人間がいかにサルであるかに確信を持ちます。男女や老若もそう見るとたいてい説明がつきます。私たちは進化の過程で草木や石を触ってその感触を知り、石英や氷はそれらの中で特別なものだといったことを体験してきたはずです。時代が進むにつれて、こうした進化で出会わなかったものに出会うようになりました。その異質感をおかしいと感じる基準を、ヒトとしての直感に立ち戻って

見直したらどうかと思うのです(これについて9月28日に関連したことを書きました)。

ヒトの生物学的進化の過程でことばの発生がありましたが、文字は生物の進化から遊離したものでした。しかし文字は人に受け入れられました。ほかの人に意志を伝えたいという思いは手紙を発明させました。手紙を書くときの思いや、受け取ったときの喜はヒトの心をそのまま満たしてくれたはずです。一過性の会話にはない、「書き直し」や「繰り返し読むこと」は革命的なことだったはずですが、人の心理との齟齬はあまりなかったようです。

会話と違うものとなった文字による記録は「残る」ようになりました。これはたいへんなことのように思います。「文字以前」には「あの爺さんはよくあんなことを言っていた」ということはあっても、言ったことそのものが残ることはなかったからです。「俺の考えたことは紙に残せば未来の人が読める」となると、人の文章に対する人々の考えは相当違ったものになったはずです。

［感じのよさ］

ところで、経済恐慌でドバイがたいへんなことになっているそうです。ついこの前まで、その繁栄ぶりが喧伝されていました。富豪が買い物の上限をしたことがないと嘯いていました。金を求めて人や物が集中したことでしょう。そして、予想したように崩壊しました。これを見て「ああ何と残念なことだ」と思う人がどれだけいるでしょうか。人の悪い私などは「それみたことか」と意地悪くみてしまいます。

一方、戦争が起きたりすると、いつもは聞かないバチカンという国でお祈りがおこなわれるのを見たり、アルメニアという国で国民的な歌の祭典があるとか、ブータンには名君がいて、GNPは小さくても皆が心豊かに暮らし、いい顔をしている、などというのを聞くと、「ああ小さいけど感じのいい国だな」と思います。思えば戦後の我が国はどうだったでしょうか。どうひいき目にみても、バチカンではなく、どちらかといえばドバイでしょう。

＊＊＊＊

前の職場の東京大学総合博物館にいたとき、シーボルトの植物標本がオランダから里帰りしたことがありました。日本にちょん髷の侍がいた時代に、シーボルトという若者が来て、医術を教えるいっぽう、動植物を採集して記載し、オランダに送りましたが、その標本が長いときを経て戻ってきたのです。そのときの感動を今も忘れません。この標本は、植物を採集して押し花にし、台紙に貼ったものです。その、たとえばアジサイのひと枝は、標本となって船で運ばれてオランダに届きました。枝を奪われた株はその後も生き続けたに違いありません。その株は枯れたかもしれませんが、株分けや挿し木によって次世代が継続し、日本のどこかで生き続けているはずです。毎年毎年枝を伸ばし、葉をつけ、花を咲かせては枯れていき、土に戻りました。いっぽう、オランダに渡ったアジサイの標本はそのときに「フリーズ」したのです。それらの標本が200年のときを越えて里帰りしたのです。

私が年頭にあたって考えたいのは、そのあいだオランダの研究者が責任をもって管理をして

くれたということについてです。これをしてくれたオランダは「感じのいい国」です。それが文化というものの、実に純化された形なのだと思います。もっともオランダは経済大国でもありますが。

［伝統ということ］

私たちの世代は戦後の教育を受けました。悪い日本、あるいは愚かな日本は戦争を否定し、ついに新しいよい社会になったというトーンの中で育ちました。継続ということは敵視されないまでも、重視はされませんでした。新しいものがよいと教えられたのです。社会は電化され、モータリゼーションが広がり、豊かに、つまり良くなったと聞かされました。

私は生き物が好きで、生物学を勉強したくて、大学に進むとき理学部の生物学科というところに行くことにしましたが、当時はDNAの発見がもてはやされていた時代で、生化学などを勉強させられました。私は教室での勉強とは別のものとして、登山をし、仙台近郊の野山を歩き回っては動植物を観察していました。そうした中でときどき古い先生の中に絵が巧みな先生がおられ、えも言えない共感を覚えました。さまざまな論文やテキストを見ると、19世紀や20世紀の前半にすばらしい図があることを知りました。現代生物学に不要とされる、生き物を描くということに本質的なものがあると直感したのです。また動植物の収蔵された標本室に行き、自分が生まれるより前に採集された標本に接しました。そのときにも共感がありました。そういう「古い生物学」を捨て去ってよいものだろうかと、自分が教わっている生物学に異質感を覚えたのです。

私の中に疑いのようなものが生じました。「本当に新しいことばかりがいいのだろうか」と。そして、私はもっと伝統を尊重した生物学を学びたいという思いが強くなりました。東北大学にいてそう思うようになったのか、そういう思いがあったのが、東北大学にいって触発されたのか、はっきりとはわかりません。いずれにしても「自分の腑に落ちるもの」を見極めたいと思うようになりました。それは煎じ詰めれば「自然に直面すること」と「伝統を重んずること」です。

＊＊＊

文字をもたなかった時代のヒトは、発することばを「文字以降の人」とは違う感覚で捉え、もしかしたらよりよく憶えていたかもしれません。私たちには「あとで読めばよい」という意識があります。それに頼りすぎて、書いた物がないとうろたえます。記録が発生したために、人はそれに依存的になったはずです。進化からはずれた文字というものに頼ってしまった人の悲劇が始まったといえるかもしれません。しかし同時に伝統を重んずるという精神も生まれた、あるいは強くなったはずです。

［技術発達とヒトの心］

私は新しいものが苦手です。年賀状の宛名が印刷され、書き手がわからなくなったことを嘆かわしく感じるほうです。技術の発達には助けられることのほうが多いのですが、心が伝わるくらい使いこなせないのであれば、本当の技術

の発達とはいえないはずです。私は自分の技術習得の不完全さを棚にあげて、パソコン技術はまだまだだと嘯ぶいています。

IT技術の発達は今年もさらに進むに違いなく、私などはますます置いてゆかれそうで、情けない思いがします。でも同時に次のような感覚があります。

モンゴルやネパールの野外調査に行って、「自分が移動するには歩かなければならない」という、あまりに当たり前のことが体に染みたあとに成田に帰ってくると、地面が動き、階段が上がり下がりするのをみて、「違うだろう」と感じる自分の感覚は生物学的に正しい。しかしいまの日本ではそれを正しいといってはならず、もっと早く動けと思え、人身事故で電車が遅れるなどとんでもないと思え、という圧力があります。こういうとき、ヒトに立ち戻れば、それがおかしいことに気づくことができるように思います。このことは技術が心にまで影響を与えるようになった今日、技術開発にたずさわる人に考えてもらいたいことです。

新しいものを追いかけることと伝統を重んじることは相反することではないはずなのに、私たちは前者だけしか考えて来なかったように思います。オランダが極東の島国の押し花を200年も大切に保管してくれた精神に通じるものなしに利便性だけを追求するのでは、とうてい「感じのいい国」にはなれそうもないように思います。

私たちが勤勉な国民であることは世界も認めるところです。でも何のために一生懸命働くのか。どうせならその努力が「いい感じ」につながってほしいと思うのです。

いまの日本の社会がもつ閉塞感はかなりつらいものがある。いろいろな見方があろうが、私なりにいえば、個人と社会の関係にあるべきバランスが崩壊しつつあるのだと思う。自分のためには動くが社会のためには指を動かすことさえしない。そうしたいという気をおこさせないものがいまの社会にあり、個人が社会に貢献しないためにいっそうその社会が魅力ないものになるという負の螺旋が回転している。社会のために自己犠牲が推奨・強制されたり、立身出世こそが人生の目標であるべきとした時代がよいとはまったく思わない。しかし自分の生まれ育った土地や、自分を包んでくれた社会を愛したり、ありがたいと感じることができないという状況は、まちがいなく不幸なことである。大人は若者を、若者は大人を敵視し、社会は老人を邪魔者扱いし、子供にやさしい眼差しを向けない。そのような在り方は、ヒトという霊長類が獲得してきた生物学的性質となじまない。生物学を学ぶ者として、そういう点から現状を問題視するが、個人としては、そういう不幸な状況のなかでも自分はできるだけのことをし続けたいと気持ちを奮い立たせることが多い。

ニュースはいやな出来事をとりあげる。現実にそういう出来事が多いからその頻度が高くなっているのだろうが、しかしずいぶん偏りがあるとも思う。アメリカの高校生が死ねば大ニュースだが、バングラデシュで数万人が洪水で死んでもほとんど採り上げられることはなく、新聞に数行の記事がのるだけだ。アメリカの大統領選挙は結果ではなく過程も追跡され、選挙の

裏方の話題までも詳細に紹介されるが、アジアやアフリカの大統領や首相占拠は結果さえ知らされない。そうした偏りの影響力ははなはだ大きい。

私はつねづねぜひ報道してもらいたいと思っていることがある。たとえば、この巨大な人口集団である首都圏にこれだけの物資が流入し、光熱を消費していながら、停電やガス停止という話をほとんど聞かない。3 分おきに来る電車が事故のために遅れてもすぐに復旧する。これは奇跡に近いことだと思う。日本各地から送られてくる電気や水道がなければ 1 時間も機能しないはずである。そうした奇跡を支えてくれている組織や人々のことを思いやって感謝する日を 1 年に 1 日くらい作って大いに謝意を表現してもばちはあたらないだろう。そうしたことが報道されることで、自分たちの暮らす社会が世界標準からしてそう悪くないと知ることはよいことのはずだ。そう考えれば、テレビが報じる情報にくだらないことが多すぎる。私はテレビの影響力を思うとき、番組作りのリーダーの考えていることが理解できない。

村上春樹がイスラエルに招かれて講演したときのニュースもごく簡単に紹介されただけだった。この頃、イスラエルはガザに徹底攻撃をしていた。そのイスラエルからの招待であるから、断るべきだというアドバイスも多かったなか、村上氏はあえてそれを受け、その場で以下の講演をした。

もしここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる高後があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます。そう、どれほど壁が正しく、卵が間違っていたとしても、それでもなお私は卵の側に立ちます。正しい正しくないは、ほかの誰かが決定することです。あるいは時間や歴史が決定することです。（中略）

私がここで実なさに伝えたいことはひとつです。国籍や人種や宗教を超えて、我々はみんな一人一人の人間です。システムという強固な壁を前にした、ひとつひとつの卵である。我々にはとても勝ち目はないように見えます。壁はあまりに高く硬く、そして冷ややかです。もし我々に勝ち目があるとしたら、それは我々が自らの、そしてお互いの魂のかけがえのなさを心事、その温かみを寄せ合わせることから生まれてくるものでしかありません。（後略）

このすばらしい文章はもちろん英語で語られた。それを味わうのもよいことだと思う。

Between a high, solid wall and an egg that breaks against it, I will always stand on the side of the egg. Yes, no matter how right the wall may be and how wrong the egg, I will stand with the egg. Someone else will have to decide what is right and what is wrong; perhaps time or history will decide.

I have only one thing I hope to convey to you today. We are all human beings, individuals transcending nationality and rave and religion, fragile eggs faced with a solid wall called The System. To all appearances, we have no hope of winning. Thaw al is too high, too strong – and too cold. If we have any hope of victory at all, it will have to come from our believing in the utter uniqueness and irreplaceability of our own and others' souls and fro othe warmth we gain by joining souls together.

イスラエルからの招待を断ることは簡単である。それに喝采を送る人もいるであろう。しかしそれは実質的には黙殺されたも同然であろう。村上氏は招待した国を批判したのである。こう

いうのを真の勇気というのだと思う。しかし思えばイスラエルもたいしたものである。事前に講演内用を伝えていたにもかかわらず､「これでは困る」ということもなく、そのまま講演させたのだから。自分たちの主張はする。2000 年間流浪の民としての辛酸をなめた民族が安易な妥協をするわけはない。手に入れた国土を死守しようとするのは当然でもある。それでも村上氏の講演を受け入れたのは、人類としての正しさは歴史がするものであり、異なる意見を排除することではないということが理解されているからだと思う。

村上氏の講演は戦争に関するものではあるが、私はその主張を野生動物の保全と重ねて読んだ。思えば人類は野生動物という卵に対する壁であった。一度も卵の側に立ったことはなかった。しかし 20 世紀の後半になって一部の生物学者が現状を憂い、保全生態学という学問を立ち上げた。その源泉は十九世紀の末に求めることができ､レイチェル･カーソンの存在などを経て、地球規模の潮流となっていまに引き継がれた。私たちは研究というクールな行為を進めるが、その底流には野生動物の側に立ちたいという熱い思いがあるはずである。その実現には、凡人であるわれわれには多くの重い荷があるが、一日一日の努力を積み重ねることによって少しでもその実現に役立ちたいと思う。

村上氏の講演は閉塞した社会に押しつぶされそうになる私に勇気を注入してくれた。日本が国として発展途上国に大金を投じても、あるいは宗教団体や個人が大きな献金をしても、日本のイメージはよくはならないように思う。しかし村上氏の今回の行動とことばは、日本にもこうした良心の人がいることを世界に伝えたと思う。何兆円というお金よりも言葉、真心から出た言葉のほうがよほど人の心を打つ力をもつのだ。そう思うと、自分の国が「感じのいい国」であるようでうれしかった。

++

修士課程で気がついた研究の魅力

東大院　柿沼 薫

研究は「国境を越える」ことが、魅力の一つであると思う。普段読む論文は著者が知人であることもあるが、多くの場合、海を越えたところに住む知らない誰かが書いたものである。年齢も時には性別もわからない誰かが書いた論文（紙数枚）にとても興奮したり、感動したりすることがあるのだから、不思議だなぁと思う。

国際草地学会に参加したときは、自分の研究についていろいろな人と話せた。知らない人と話す訳だから、はじめはとまどったり躊躇したりするものだが、挨拶も何もしないで、ポスターを見ながらいきなり議論が始まることもあった。肌の色、年齢、性別が違い一見自分と接点がなさそうな人と、研究を通じてつながることができるなんて、研究はすごいなぁと思う。

「国境を越える」と似ているが、研究は「十人十色」であることも魅力的である。研究を行うにあたって、その研究の新規性や独創性が求められる訳だが、それは言い換えれば研究者の

個性を存分に発揮することができるということだ。

この二年間で、論文、学会発表、そしてゼミ発表でも、様々な個性を持った研究と出会えることができた。とても真似できないと思う研究に出会ったときは、同じ問題に対し私らしてくアプローチするとしたらどうするべきだろうと考えることができた。自分の研究に対しても、多くの人たちによるさまざまな視点から指摘や質問が来て、たくさんの議論をしてきた。その議論がなければ、私の修士論文は出来上がらなかったと思う。研究の実際を知るまでは、研究とは一人で孤独と戦って行うというイメージがあったが、実際には一人の力では形にならないのだと実感した。

このように、研究は（しばしば国を越えた）人との関わりによって行われるものだと思う。自分らしい研究をして、どこかの誰かに私の論文を読んでもらいたい、そして議論をしてみたいと思う。そのためには、今後も自分らしさとは何かを模索し、研究ができることに感謝しつつ日々精進したい。

モンゴルのブルガンで調査する著者

++

編集後記：今月はあれこれ思うところがあって、私の原稿がずいぶん長くなり、いつになく厚くなるかなと思っていたのですが、事情があり投稿者が柿沼さんだけになり、結果としては長さ的にちょうどよいものになりました。3 月は別れの月、4 月は出会いの月です。新しい気持ちで新年度を迎えたく思います（高槻）。